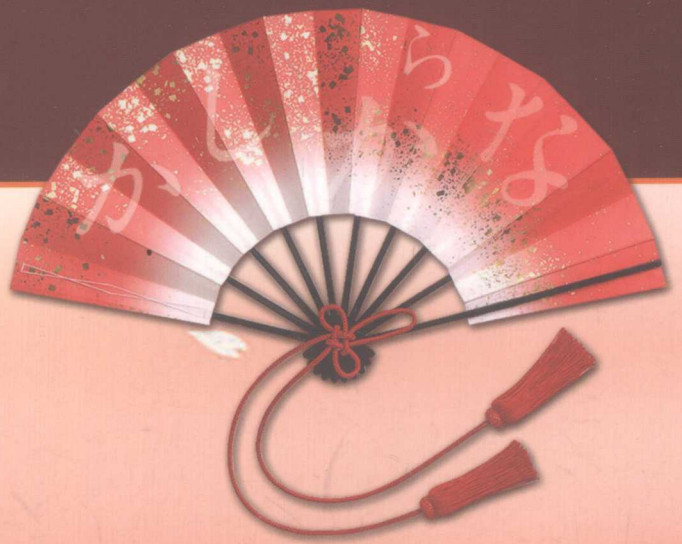


日语终助词性差的 动态变化和日语教育

日本語終助詞の男女差に関する
動態的研究と
日本語教育

曹春玲 著

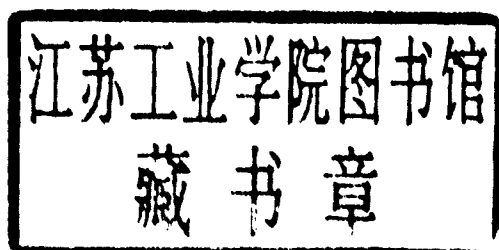


海南出版社

日语终助词性差的动态变化 和日语教育

日本語終助詞の男女差に関する動態
的研究と日本語教育

曹春玲 著



海南出版社

图书在版编目 (CIP) 数据

日语终助词性差的动态变化和日语教育: 日文 / 曹春玲著. —海口: 海南出版社, 2009.4

ISBN 978-7-5443-2995-8

I. 日... II. 曹... III. ①日语—词汇—研究 ②日语—教学研究 IV. H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2009) 第 042432 号

日语终助词性差的动态变化和日语教育

作 者: 曹春玲

责任编辑: 王振德

封面设计: 颜好强

印刷装订: 海南金永安印业有限公司

海南出版社 出版发行

地址: 海口市金盘开发区建设三横路 2 号

邮编: 570216

电话: 0898-66830931 66830932

网址: <http://www.hncbs.cn>

E-mail: wd3838@sina.com

经销: 全国新华书店经销

开本: 787mm × 1092mm 1/16

字数: 250 千字

印张: 17.125

版次: 2009 年 4 月第 1 版 2009 年 4 月第 1 次印刷

书号: ISBN 978-7-5443-2995-8

定价: 34.80 元

巻 頭 言

曹春玲氏のこの度のご出版に際し、まずもってお祝いを申し上げたい。氏の旺盛な探究心と真摯な研究態度からすれば、このような大著が完成したことは驚くに値しないかもしれない。されど、彼女の大学院博士後期課程の研究を基にした本書が公刊され、その学術価値が多く日本語研究者、教育者と共有されることは、博士後期課程の指導教官として氏を後押しした者として、これに勝る喜びはない。

曹氏が日本に留学してきたのは1997年である。広島大学での研究生生活を終え、その後広島市比治山大学大学院現代文化研究科で修士号を取得、2003年に広島市立大学国際学研究科博士後期課程に入学してきた。私が氏と出逢ったのはこのときである。早速修士論文を読ませてもらったところ、氏の着眼点の素晴らしさに、研究の将来性を強く感じたことを今でも鮮明に覚えている。私自身、ここ数年来、語用論の研究に関心を寄せているが、氏の研究テーマは近年の語用論研究や言語教育研究のいずれからも高い可能性を秘めていることを確信した次第である。苦節十年、まさに「十年一日の如く」、「よねのわ」の僅か四文字に秘められた日本語終助詞の語用論的特徴を追い続けてきて集大成されたのが本書である。

ここで曹氏の研究の特徴について3点ほど触れておきたい。まずは、すでに述べたこととも関係するが、研究アプローチの鋭さを挙げておきたい。膠着言語として知られる日本語研究では、いわゆる「てにをは」のような格助詞や、本書が扱う「よねのわ」のような終助詞をテーマに、統語論や意味論ではすでに多くの研究実績があげられている。しかし、曹氏の研究は社会言語学的な言語変化や語用論に代表される実際の言語使用という観点から終助詞を動態的に捉える試みであり、この点が既存の終助詞研究とは異なる独創的な点である。よく知られるように、日本語は男性と女性のことば使いが語彙や発音面に顕著に表れる言語である。しかし、社会のグローバル化に伴い、男女の役割変化が生じ、そのことが男女のことば使いの変化に影響していることは想像に難くない。その日本語の動態的变化を実証するために曹氏が選んだのが終助詞「よねのわ」という訳である。曹氏は自らの日本語学習を通じて、早くからそのテーマの重要性に気付き、博士前期課程（修士課程）の段階から一貫してこの課題に取り組んできた。

二つ目の特性は研究の方法論である。研究の標的を四つの終助詞に定めたことはよ

しとしても、問題はそれをどう具現化するかである。氏が研究対象としたのは書きことばではなく、話しことばである。戦後日本社会の話しことばを研究対象として設定しても、話しことばの言語データが手に入らなければ研究も何もあったものではない。そこで曹氏が選んだのが、会話文が頻繁に登場する文学作品と映画の台本を使って、1950年代、70年代、90年代の違いを定量分析、定性分析することで、男女による終助詞使用の特徴とその変化を動態的に捉えようとする試みである。氏の博士課程の研究時間の大半はこの分析作業に費やされたと言っても過言ではない。氏には「研究成果の良し悪しはかいた汗の量に比例する」と何度も助言してきたが、彼女の研究はこれを堅実に守り抜いた成果である。

三点目として指摘しておきたいのが、曹氏の研究の窮極的な目標が、応用言語学的な観点から研究成果を日本語教育に応用することにあったということである。氏がそもそも日本への留学を目指したのは、日本語教育者として教壇に立つためであった。実際の言語使用は教科書どおりにはいかないことは多くの外国語教員が体験することである。自らの日本語学習や日本語使用経験に裏打ちされた確信、すなわち「教科書には何かが欠けている」という明確な意識があったからこそ、氏は研究のスタートラインに立つことができたと言えるだろう。

博士論文完成の後、曹氏は中国に帰国し、現在は中国海南師範大学外国語学院の副教授として教壇に立つ毎日である。院生時に研究に躓いたとき、私の研究室で「先生、私どうしたらいいか分かりません」と落涙しても曹氏は決して研究を諦めることはなかった。自分自身の妥協を許さない氏のあの頑張り様は、多くの若手研究者や教育者が忘れかけている大切なものを喚起させてくれるし、彼女が単に研究者としてだけではなく、立派な教育者であることを如実に物語っている。曹氏は今でも私の「自慢学生」であり、氏の後輩学生には彼女の博士論文を見せながら、自らの手本とするよう話している次第である。

曹氏には、本書の刊行に満足することなく研究に邁進し、研究や実践を通じて日本語教育の発展に力を尽くしていただきたい。本書が日本語教育関係の多くの読者に読まれることを切に願うとともに、曹春玲氏の研究、教育両面におけるますますの活躍を期待したい。

2008年8月21日

岩井千秋（応用言語学博士）

広島市立大学国際学部教授
同国際学研究科応用言語学担当

序 言

首先表示祝贺。从她旺盛的探究心和真诚的研究态度来说，完成这部大著也许不会让我们感觉到吃惊。然而，这本以博士后期课程为研究基础公开出版的专业书籍，其学术价值能为更多日语研究者和教育者所共有，作为她的指导教官，为有后来者居上而感到无比喜悦。

她于1997年来日留学，在广岛大学完成研究生的学业，在比治山大学大学院现代文化研究科取得了硕士学位，2003年考入广岛市立大学国际学研究科攻读博士后期课程。我和她相遇的同时读了她的硕士论文，发现她的论文有着非常了不起的着眼点，感觉有着很强的研究前景，故至今记忆犹存。几年来我自身一直从事语用学研究，确信她的研究题目近年来在语用学和语言教育研究领域，都蕴含着很高的学术价值。她十年如一日苦读苦究苦探，经过不懈追求和努力完成了仅仅由4个文字「よねのわ」所蕴含着的日语终助词的语用学特点。

关于她的研究有3个特点。首先从研究的着眼点来说。作为胶着语我们都知道，日语研究是“てにおは”这样的格助词和本书提及的“よねのわ”的终助词，在统语论和意味论方面研究的论文其实并不少。但是她的研究是从社会语言学的语言变化及被语用论所代表的实际语言使用的观点，来捕捉日语终助词的动态变化现象，这就是她研究终助词的独创意义所在。众所周知，日语的男性和女性的语言使用是显著表现在语句和发音方面的一种语言。但是，随着社会的全球化男女的职能发生了变化，不难想象男女语言的使用难免不受影响。她为了证实日语发生的这些现象，选择了终助词“よねのわ”。她通过自身学习日语的经验及早发现了这个课题的重要性，从博士前期课程阶段开始一直围绕着这个研究课题尽心探究。

其次是研究的方法论。研究的目标虽已定，但是问题点怎么去具体化呢？所以她把日常会话作为研究对象而不是文章。设定了战后日本社会的会话语作为具体的研究对象，但是如果没有语言数据什么也做不了。于是她决定使用频繁出现会话文的文学作品和电影台词，根据50年代、70年代、90年代3个不同年代的语言数据定量、定性分析，掌握了男女终助词的使用特点和动态变化状态。也就是说，她的博士后期课程研究的大量时间，几乎都用在了分析作业上。我常常对她说：“研究成果的优劣和

你所流的汗水是成正比的。”她的研究成果始终坚实地遵守了这一信念。

最后想说一下她研究的最终目标。从应用语言学的观点来说，她的研究成果完全可以应用于实际日语教育当中。她最初来日留学的奋斗目标，就是要作为日语教育者站在教坛上。但是，实际语言的使用和教科书中所指示的完全一样是不可能的，多数外国教员对此也都有所体会。然而她有着自身学习和使用日语的经验，确信能够意识到“教科书中缺欠了些什么”知识，而后予以补充。我认为她已经有能力站在教育和研究的起跑线上了。

曹女士取得博士学位后决然回国，现为中国海南师范大学外国语学院副教授、每天扎在教坛中。但每当想起她攻读博士时对研究有踌躇的时候，在我的研究室流着泪说“老师，我不知道该怎么办啦”之类的话，可谓言犹在耳，然而她即便是流泪苦闷也决没有放弃她的追求。她决不原谅自身妥协的这种顽强精神，激发了许多中途放弃的年轻研究者和教育者。这不仅仅说明她是个研究者，也是个很出色的教育者。即使现在她仍然是我“骄傲的学生”，我常常把她的博士论文给新来的研究生阅读，并让他们学习她不懈努力的探究精神。

我希望她不要满足现状，应向更高台阶迈进，通过研究和实践极尽全力发展日语教育事业。希望这本书能让更多的日语教育者和广大读者所阅读，也希望曹春玲女士今后在研究和教育两方面更上一层楼。

日本广岛市立大学国际学研究科应用语言学教授

岩井千秋（应用语言学博士）

2008年8月21日

目 次

序章 本研究の背景と目的	1
0.1 背景	1
0.2 研究対象と目的	4
第1章 関連する先行研究	7
1.1 日本語文末表現形式に関する先行研究	7
1.1.1 終助詞の定義と特徴	7
1.1.2 終助詞の分類	16
1.1.3 終助詞と他の助詞の関係	22
1.1.4 終助詞の接続方法	25
1.2 男女の性差に関する先行研究	27
1.2.1 英語におけることばと性差の概観	27
1.2.2 日本語性差と他の言語との比較	29
1.2.3 日本語の男女差の形成の概観	33
1.2.4 近代における男女差の形成	34
1.2.5 東京圏職場の談話調査による現代日本語の男女差	38
1.2.6 現在の女性の話ことば	39
1.2.7 終助詞における男女差	40
1.2.8 男性的文末表現	42
1.2.9 日本語の男女差の研究の方法論	43
1.3 終助詞と性差	45
1.3.1 終助詞における男女の領域	45

1.3.2	終助詞の機能による話者の性提示	46
1.3.3	終助詞における男性語と女性語	47
1.3.4	文法的特徴から見る男女差	50
1.3.5	辞書による終助詞と男女差の解釈	51
1.4	本研究に関する言語理論	52
第2章	研究の課題と研究の方法	55
2.1	問題の提起	55
2.2	研究課題	56
2.3	研究の方法	59
2.3.1	実証研究1—文学作品	60
2.3.2	実証研究2—映画作品	68
2.3.3	実証研究3—アンケート調査	72
第3章	調査の分析結果	81
3.1	実証研究1（文学作品の分析）の結果	81
3.1.1	「よ、ね、の、わ、ゼロ」の全体像	82
3.1.2	学生と社会人の違い	91
3.1.3	「よ、ね、の、わ、ゼロ」の出現頻度に関する統計処理結果	97
3.1.4	まとめ	103
3.2	実証研究2（映画作品の分析）の結果	104
3.2.1	「よ、ね、の、わ、ゼロ」の分析結果	104
3.2.3	まとめ	114
3.3	実証研究3（アンケート調査）の結果	115
3.3.1	「よ」の調査結果	115
3.3.2	「ね」の調査結果	145
3.3.3	結果のまとめ	170
3.4	考察—3つの研究を通じて	172
3.4.1	男女差の動態的変化の実態	172
3.4.2	「よ、ね、の、わ、ゼロ」の方向性	175

第4章 日本語教科書での終助詞の扱い	179
4.1 日本語教育と性差	179
4.2 分析対象とした日本語教科書	180
4.3 各教科書の構成上の特徴と男女差の扱い	181
4.3.1 「初歩」	181
4.3.2 「ビジネス」	182
4.3.3 「コミュニケーション」	183
4.3.4 「なめらか」	184
4.3.5 「中級」	185
4.4 5つの教科書全体の結果	185
4.4.1 「初歩」	187
4.4.2 「ビジネス」	188
4.4.3 「コミュニケーション」	189
4.4.4 「なめらか」	191
4.4.5 「中級」	193
4.5 各教科書における終助詞の男女の扱い	195
4.6 「よの四形」と「ねの五形」の男女差	198
4.6.1 「よの四形」について	198
4.6.2 「ねの五形」について	199
4.7 分析結果のまとめ	201
4.8 教科書と実証研究の結果の異同	202
4.9 日本語の男女差と日本語教育	203
第5章 結論と今後の展望	210
5.1 結論	210
5.2 日本語教育への示唆	212
5.3 問題点と今後の展望	213
5.3.1 本研究の問題点	213
5.3.2 今後の課題	216

主要参考文献	218
対象資料と例文出典	225
附録資料Ⅰ 芥川賞と芥川龍之介について	228
附録資料Ⅱ 「よ」と「ね」の相関係数の結果	229
附録資料Ⅲ 「よ」と「ね」の分散分析結果の一覧表	234
附録資料Ⅳ 芥川賞受賞作品リスト（第23回～第130回）	245
附録資料Ⅴ アンケート調査表	250
附録資料Ⅵ 各映画の登場人物の一覧表	260
后记	262

序章 本研究の背景と目的

研究のはじめにあたり、言語と性差の研究について主に次の3点から概観する。一つ目は、日本語研究として、国語史の意義という観点からである。二つ目は社会言語学と語用論的な観点からである。三つ目は、外国語としての日本語教育という観点である筆者の日本語の男女差を学んだ経験も含めている。

0.1 背景

言語における性差研究は英語圏における60年代のフェミニズム運動から女性の言語研究として生まれた。70年代以降英語に起こったもっとも重要な変化は性差別の慣行に対して社会がとってきた態度と関係するものである（本名 1994: 109）。

言語と社会の間には密接な関係がある。ある言語を所有している社会のさまざまな特質は、その言語にみごとに反映する。その社会を支える人たちの思想、意識、あるいは社会の仕組みの特長等は、そこで使われる言語を見ればよくわかることが多い。あるいは一定の時代の特長なども、その時期特有のことばづかいを見れば非常によくわかることがある。すなわちことばというのは社会のいろいろな面でのありようをおのずとその言語自体に内蔵すると言えるのである（寿岳 1979: 1）。

性差による言語の違いは、そうした言語に内蔵された社会要因の典型である。現在、言語の性差の研究には大別して二つの側面がある。一つは性による言語差違、すなわち、その言語の使用者が男性か女性かによって生ずる違いを研究するもの、もうひとつは言語が男性や女性をどう描いているか、そこに見出される差違を明らかにするものである（本名 1994: 110）。

日本語の性差研究は20世紀前半から行われてきた。ただし、日本語の女性語研究は西欧のそれとは多少異なる。日本語の性差研究と言えば伝統的に国語史的観点

から特殊位相のことばとしての「女房ことば」^①、「遊女語」を研究することが多かったが、現代語に関する研究はそれほど行われてこなかった。そうした中、日本の国語学的な流れの中で初めて本格的に社会における女性の地位と女性語関連づけて研究したのは寿岳（1979）の「日本語と女」である。彼女の研究は、いわゆる西欧風の社会言語学の中で行なわれたものではないが、「日本語と女」の中で、古典に描かれた女性像や歌謡曲の歌詞などを通して、日本人の心に、好ましい「女らしさ」の概念が構築されている。

その後、1980年代に入ると、日本語における女性の表現形式や女性を表現することばについて研究が増加していった（宇佐美 2005: 1）。特に、女性の表現形式研究を主導した井出は女性的表現の研究に関する論文を数多く発表し、社会言語学的観点から性差の研究に取り込んだ。井出は「女性語の特徴は、一般的に、日本の女性の関心が傾く事柄、すなわち形式主義、礼儀、やわらかさ、生活の感情的側面を反映している」と述べている（井出 1979: 63）。そして言語の性差について、「絶対的性差」と「相対的性差」の概念^②を提言した。

次に日本語教育の立場からの男女差の研究と言え、現代日本語研究会による研究をはじめとして、語彙や語法を中心に男女差の違いや、それらに現れるの意味用法が研究されてきた。たとえば、上野田（1976）、遠藤（1997、2000）の研究は主に語彙に関するもので、発表された論文はもっぱら終助詞の意味用法および終助詞による男性と女性の言葉遣いについてである。また、佐々木（2000）の研究も語彙を扱っている。彼女がことばを通じて見る現代社会の性差に関わることばは、日本社会の変化に伴い変質しつつも、なお性差が歴然と残っていると結論づけている。彼女は新聞や雑誌の調説記事、小説や論文、そして歌の歌詞やコミック、コマ

① 女房ことばは室町時代の初めごろから、御所や仙洞御所に奉仕する女性、すなわち女房たちが日常生活の語について特別の表現を考察したのが女房詞の始めである。主として食物関係の事物や、あるいは、女性特有の生理等の不快感、不潔感などを喚起しやすい事物を、独特の婉曲表現を用いて言い換えたものである。このような隠語的な意味を持つ語は長い年月使用されているうちに、上品な語、優雅な語として認識された。いま現在普通に用いられる婉曲表現として、蛸を「た文字」、砂糖を「さ文字」というように文字詞と呼ばれるものがある。たとえば、「おいしい」「しゃもじ」「おひや」「おでん」「おなか」など、男性に使われるようになった語も多い。（「女性語」金丸美美執筆より「日本語百科事典」）

② 男性は、男性だけに特徴のあることばを使い、女性はそのことばを使わない。また、その逆に、女性は女性の特徴のあることばを使い、男性はそのことばを使わない。このような差を「絶対的性差」と呼ぶ。これに対して、その特徴が、ある時には男性に、ある時には女性にと、双方の使うことばに現れる性差のことを「相対的性差」と呼ぶ（井出 1979: 63）。

ーシャルなどの事例から「日本語の女と男」に関する語彙を選択し、『女と男の日本語の辞典、上・下巻』を編集した。

日本語学習者の立場からすると日本語の男女差を学ぶことは決して容易ではない。たとえば、ある女子留学生は「おい、行くぞ」と男性の言い方で発言してしまい、周囲の日本人学生はみんな彼女が冗談を言っているのかと思ったようである（佐々木 2000: 5）。実は、彼女は単にテレビで覚えた日本語を口にしただけであった。また、ある中国の男性は日本語における男女差の区別をまったく知らないまま、日本人女性と結婚し、初めて学んだ日本語は妻からの日本語であった。その結果、たとえば、「行くわよ」と発言してしまい、日本人の友人の失笑を買ってしまった。これらは単に終助詞をひとつ不適切に使ったに過ぎない例であるが、前の女子留学生の場合同様、その誤用が与える影響は単なる文法的間違いでは、すまされないほど重大である。

日本語学習者にとっては、終助詞における男女差の問題だけでなく、その意味用法も重要なことである。たとえば、上野田は日本語を習っているある人が「『は』や『が』の助詞を間違えても、ああまた間違えたと思うだけだけれど、終助詞を間違えるとひどく気になります。」と述べている（上野田 1976: 62）。日本語は、終助詞の使い方を誤ると相手に不快な気持ちを起させかねない、そういう言語なのである（同書: 62）。

私的なことであるが、筆者自身、日本では男性と女性が話すことばに微妙な違いがあることが認識できるようになったのは、学習開始からかなりの年月が経ってからである。違いがわかるようになってから日本語における男性、女性の性差の存在に深い言語学的関心を持ってきた。中国語には男性用語と女性用語、及び語法的な男女差は存在していない。語彙面では男性の表現形式と女性の表現形式というものが皆無と言うわけではないが、日本語に比べれば数は高々知れている。また、中国語では口調によって男女差を意識的に区別することが可能である。しかし、日本語と比較すると、中国語は性差がはるかに少なく、男女差については中性的な言語と言えるだろう。

日本での生活が長くなればなるほど、さらに筆者は最近の日常生活では、日本人が小説や映画、テレビほど男女による話していないことに気がついた。また、若い女性が自分のことを「ぼく」、「おれ」と呼んだり、「やれよ」と言ったり、男性が

「…するわ」とか「…かしら」^①と言ったりする場面に出会った。これらは先行研究で指摘された日本語の男女差と違っていたので、大きな驚きを感じた。こうした経験を通じて日本の社会の民主化と平行して進行している男女間の平等化が少しずつではあっても日本語における男女差を縮小させる方向に向かっているのではないかと思うようになった。この背景には「男は男らしく、女は女らしく」という価値観が日本社会の中で変化しつつあり、それがことばに反映していることを意味しているのではないだろう。

戦後、日本人の生活は急激に変化した。女性の生活について言えば、たとえば、服装においては、着物を脱ぎ、もんぺ、ズボンになるというふうに、活動的な動作や敏捷さにつながるものが用いられるようになっていった。その過程で、男性や女性の使うことばも著しい影響を受けたとしても不思議ではない。さらに、現代日本社会では男女平等によって、各種の職業につくことが可能になってきた。その結果、日本語における女性の表現形式はしだいに男性化しつつあることが指摘されている（遠藤 1997: 166）。あるいは、その反対に男性の表現形式が女性に近づいてくることがありうるだろう。社会的ニーズが従来の男性の役割やそれに対する意識を変え、それに伴って男性、女性の言葉遣いも変化してきていることは想像に難くない。

0.2 研究対象と目的

日本語における男女差は他の外国語、たとえば、中国語や英語と比べその違いが著しい。日本語の男女差は、感嘆詞、美化語、敬語、人称代名詞それに終助詞などにその違いが現られる。具体例を挙げてみよう。

【1】 男性 A と女性 B が銀座の通りを一緒に歩きながら話をしている場面。

A: 日本女性は世界一オシャレだと思うよ。

B: そうね。ホントにファッション意識が高いわね。

A: でも、どうして有名ブランドばかり持ちたがるのかなあ。…

①「かしら」は「か知らん」の転である。江戸語では「かしらぬ」「かしらん」の形で用いられることが多いが、時には「かしら」の形も見られる。明治以降には「かしら」となった。主として女性が用いる。「(大辞林)」。

B: …わたしは他人の物差しじゃない、わたし自身の価値基準で選ぶわ。

A: いいことだよ!

B: 身に付けるものより、何か本当に大切なのかに気づくことが大事でしょ。

(2003 年教育テレビ、英会話、下線は筆者による)

上例【1】のAとBの対話において、どちらが男性でどちらが女性かは一目瞭然である。それは日本語には話をする時に、男性と女性の独特な言語形式があるからである。これに対して、中国語や英語ではこれほどまでに顕著な男女の区別はない。そもそも、日本語において女性の表現形式と男性の表現形式が特徴的であると考えられるのは、それが目に見える形で表示されるからである。例えば、中国語の、1) 真好看! (zhen hao kan) 「きれいだわ」、2) 真会说! (zhen hui shuo) 「あら、お上手をおっしゃること!」、英語の、1) It's lovely 「きれいだわ」、2) How flattering 「あら、お上手をおっしゃること!」などの表現であれば、このような中国語や英語の発話は女性だということはある程度判断できるが、これらはむしろ例外的で、日本語のような男女の表現形式として特有の言語形式が使われているわけではない。

さらに、こういった男女の違いを表す例として、日本語には次のような表現がある。

【2】男: おれ、腹へったなあ、何かうまいもののくいたいな。

女: あたし、おなかすいちゃった。何かおいしいもののたべたいわ。

(寿岳 1988: 65、下線は筆者による)

男女差について例【2】には二種類の特徴が表れている。ひとつは冒頭の人称代名詞の部分「おれ——あたし」であり、他方は文末表現の部分「な——わ」である。これらの特徴がよく見出されるのは、家族や友人など親しい人とリラックスして話す時である。一人称代名詞について言えば、「おれ」「ぼく」を使うのはほとんどが男性であるし、「あたし」「あたくし」「うち」を使うのは大半が女性である(尾崎 2002: 52)。

本研究が対象とするのは、上述の人称代名詞に見られるような男女差の語彙的特徴ではなく、「な——わ」のような文末表現形式或いは終助詞を中心とする男女差である。終助詞は、言語学上は文法的意味の最小単位である形態素であるが、発話に際してどの終助詞が選択されるかによって、男性による発話か、あるいは女性に

よるそれかが容易に判断されることが多く、文法機能以上の働きをし、社会言語学的、あるいは語用論的側面を強く有していると考えられる。このように、識別マーカーとして頻繁に現れる日本語の終助詞を研究対象とすることで、それらの言語使用上の違いがどのように形成され、変化してきたかについて、戦後を中心として（1950年～現在まで）調査を行うのが本研究の主要目的のひとつである。

もうひとつの目的は、男女差が顕著に現れる終助詞を日本語教育でどのように扱えばよいかについて考えることである。日本語教育への応用が重要と考える理由は、上でも述べたように筆者自身の日本語学習体験に起因している。筆者の母語は中国語であるが、日本語に比べ、その男女差は極めて小さく（詳細は第1章参照）、終助詞の誤用は度々経験してきた。筆者が学習に使用した教科書が、こうした日本語の男女差について十分説明してくれたようには思えないし、それを学習者に的確に教えることも決して容易なこととは思われない。したがって、本研究の成果を日本語教育に応用したいというのが筆者の切なる願いである。